君のまだ見ぬ OGASAWARA

髙野敦志



目次

小笠原へ、いざ出発！

初めて小笠原へ旅立った時のこと。午前中に東京の竹芝桟橋（さんばし）を出た船は、房総の山々を左手に見送り、伊豆大島の沖を航行していった。真夏のまばゆい日射（ひざ）しによって、藍色の海に立つさざ波が銀色にきらめいている。円い水平線の彼方に見えるのは、水球を包み込む白い光ばかり……。甲板（かんぱん）に立つ僕が探し求めているのは、島影や船体でなくても、せめて海鳥が飛ぶ姿だった。入道雲を頂く三原山が消えてから、凪（な）いだ外海はけだるさすら感じさせた。船の速度は二三・四ノット、自動車でゆっくり走るぐらいなのだから。

航海はまだ一日近く続く。望遠鏡を目に当てると、水面すれす

れのところを、カモメが飛んでいるではないか！　数羽で群れており、しばらく空中を進んでいくと、疲れて着水するのだが、遅れまいとして飛び立つ。そのさまがまるで、海中から噴き出してくるかのようなのだ。

ずっと立ち通しだったせいで、足が少し重くなってきた。２等船室に戻って、客の間でごろりとなる。凪いでいるせいで、固い床が揺りかごみたいに感じられる。うとうとしたところで、ふたたび甲板に出てみると、空はかなり雲が広がっていた。

「雨ですね」

傍らにいたおじさんが言った。一瞬、耳を疑ったのだが、先ほどまでの晴れ間は消えて、たちまち本降りの雨となった。船室に逃げ込むと、開け放たれたドアを通して、灰色となった後方の水

平線に、シャワーが降り注ぐ境界を認めた。外側はすでに晴れており、遮るもののない海では、気象は前触れもなく変わるらしい。

船が八丈島の沖を通過したのは、すでに西の空が燃える時刻だった。いったん焼けた空は透き通り、夕闇がゆっくり忍び寄ってきた。このまま眺め続けていても、前方には夜の海しか待っていない。無為のまま潮風を浴びながら、僕は過去の歴史へと思いを馳せていた。

近世までの庶民にとって、八丈島や三宅島は流人（るにん）のための島であって、それより南方は未知の海域だった。僕が向かっている島々には、小笠原貞頼（さだより）という人物によって、文禄（ぶんろく）年間に発見されたという伝説がある。小笠原の存在は江戸幕府には知られており、



甲板から日没を目にする。

延宝(えんぽう)年間（十七世紀後半）には詳細な地図まで作られていた。仙台藩士の経世家(けいせいか)、林子平(はやししへい)は『三国通覧図説』（一七八五）の中で、蝦夷地(えぞち)や琉球などとともに、小笠原の地理も紹介しており、同書は半世紀後に仏語訳が出ている。

ところで、小笠原諸島は欧米では、Bonin Islandsとも呼ばれていた。これは日本語の無人(ブニン)がなまったものとされる。長らく放置されていた島々に、捕鯨で立ち寄ったアメリカ人やハワイ系住民が住み着いたのを知った幕府は、あわてて八丈島の島民らを移住させて、小笠原が日本固有の領土であると主張した。ただし、諸外国から領有が認められたのは、『三国通覧図説』の仏語訳のおかげともされ、正式に日本領となったのは、一八七五年(明治八)のことである。在住していたアメリカ人らは日本に帰化して、欧

米系日本人の先駆けとなったのである。
わが国の歴史の中で、長らく日本の支配が及ばなかった境界まで、僕は来てしまったことになる。しかし、まだ航海は三分の一も済んでいなかった。

上空には細長い筋雲が、水平線には入道雲が広がっているだけなのに、強風で吹き飛ばされた雨が、前方から斜めに降ってくる。船は今、黒潮を横切って風上（かざかみ）に向かってひた走る。左右に引き裂かれた海水は、怒号を上げて白いしぶきをまき散らす。いくら眺めていても、大洋の真ん中では、眺めは変わり映えしない。しかし、一つとして同じ形の波はない。
シャワー室へ移動した。どこと言って変哲もないのだが、ソー

プで泡立ったお湯が、船の揺れで左右に波打ち、たまったところで一気に排水溝に流れ込む。一方、トイレの方は、水を節約するための工夫がされていた。用を足した後、便器の蓋（ふた）を閉めてスイッチを押すと、真空の力によって流されて、掃除機が大きな物を吸い込んだような音がする。

　夜中は甲板に出ることが禁止されている。暗い広がりに波しぶきを眺め、単調な揺れに身を任せていると、吸い込まれそうなめまいに襲われるからだ。船体の客室で横になると、ほの明るい床に雑魚寝（ざこね）なので、島流しにされた罪人の気持ちになる。エンジンの震動と音がすさまじく、地響きで大地震が来る夢や、大風で建物が吹き飛ばされる夢を見た。両脇の鉄板にかかるしぶきの音を聞いて、大雨が降っているのではないかと思った。

小笠原のジャングル

朝食を終えて甲板に出ると、日射しがやけにまぶしい。八時過ぎ、聟島（むこじま）列島が見えてきた。最も大きいのが聟島で、次いで針の岩が迫ってくる。石剣（せっけん）が幾振（いくふり）も海から突き出した形である。その脇を通過すると、中央に媒島（なこうどじま）、水平線に嫁島が見えてくる。

父島に到着したのは、予定より三十分早い十一時頃。二見港は波の穏やかな入り江である。沖縄のような古い文化はないが、光線の強さは南国そのもので、港の白壁は亜熱帯の光を反射する。

とりあえず、空腹を満たすことにした。小笠原の名物といえば、島寿司である。これは八丈島でも見られるが、サワラを醤油と酒、味醂（みりん）に漬けたものに、洋がらしをつけて握ってある。淡泊な魚に



やっと父島に着いた！

は意外と合う。地味な味だけれども、いくらでも飽きが来ない。

小笠原村観光協会に足を運び、ジャングルフィールドのツアーに予約を入れる。一時半まで時間があるので、大村海岸を歩いていると、人なつっこいお婆さんに声をかけられ、小笠原ビジターセンターを訪れることにした。その間、いろいろなことを聞かせてもらった。

太平洋戦争中も、島は戦中らしい様子もなく、白米に刺身を食べていた。ところが、昭和十九年に初めて空襲があり、やがて成年男子を除く全島民に引揚げの命令が下った。お婆さんの身内は、マリアナ諸島から戻る途中で、アメリカ軍の攻撃で船もろとも沈

められた。
お婆さんが小さかった頃は、オカヤドカリを捕まえて、これを子供の遊び相手として売ることで、小遣い稼ぎをしていたそうだ。今のように、店で働いて金をもらうことはなかったので。その頃は本土まで船で三日、明治時代には八日もかかったという。一日余りの船旅で疲れ果てた僕には、途方もない長さの時間である。
ビジターセンターで島の自然や歴史ついて、展示品を眺めていた。間もなく一時半になろうとしていた。ジャングルフィールドのツアーの車が迎えに来た。長身の青年がガイドで、他に女性客が三名ほどいた。目指すのは初寝浦展望台である。
火山活動で生まれた父島は、起伏がかなり激しく、見上げるばかりの急坂を、エンジンの馬力を上げて登っていく。途中で境浦

を通過したが、アメリカ軍の攻撃で座礁した船が、甲板を残して海中に沈んでいた。

車を坂の途中で止めると、けもの道のような草ぼうぼうの隘路（あいろ）を進んでいく。小笠原特有の動植物が見られる。島の植物のうち、四割が固有種である。

ホナガソウは蕾（つぼみ）が紫色の花を、順々にエレベーターみたいに咲かせていく。マルハチという木は、うろこ状の幹に〇と漢字の八を逆さにした模様がついている。一枚の葉が両腕を伸ばした長さのシダで、人の背丈以上の高さを誇る。本土では草である植物が、「東洋のガラパゴス」では樹木として進化していた。タコノキは根がタコ足状に広がっている。アダンに似た実をつけ、固い実を



マルハチの木

割ると、中にナッツのようなものが入っていて、甘酸っぱい味がするのだそうだ。

途中の谷川で一休み。マルハチの下の流れには、小笠原固有の小さなアメンボと川エビがいた。ムニンノボタンは最後の一株が折られたので、バイオテクノロジーで複製されたクローンの株が、数本植えられていた。

海が見えてきた。二見港の反対の東側に出たのである。そこには乾性の低木が生えている。シマムロは別名香木とも呼ばれ、ヒノキに似た香りを、折れた枝から発している。

初寝山の頂上まで来た。左方の崖下が初寝浦の砂浜で、正面の下が石浦である。沖にはサーフィンの若者が集まっていたが、波

が穏やかすぎて、さざ波と戯れているといった感じである。本土で見られるスズメもカラスも、ここではほとんど見かけない。潮騒（しおさい）のほかには何も聞こえない。海上に浮かぶ小島が東島、左方に延びているのが兄島の家内見崎（かないみさき）である。その間が兄島瀬戸で、幅は八百メートルしかないが、流れはかなり速いらしい。

　めまいがするほど崖は切り立ってる。太平洋の青い水平線は弧を描いている。木の幹にアノールトカゲが、じっとはりついていた。暑さをしのいでいるのである。全身が緑色の珍しいものだが、これはアメリカ原産の帰化動物なのだそうだ。

　僕が目にしているのは、小笠原の自然のごく一部だ。火山が噴火してできた島々は、遠い昔にマグマの供給が止まり、山は風雨に削られて老年期にさしかかっている。あと十万年もすれば、東



兄島瀬戸は流れが速い。

側にある伊豆小笠原海溝に呑（の）み込まれる。その時、島が育んだ固有種も、運命をともにすることになるのだ。

　本当はユースホステルに泊まりたかった。見知らぬ土地から来た人と、その場限りとはいえ、友人のように語り合うのが好きで、社会人になってからも、ずっとユースホステルを使ってきたのである。ただ、島に一つしかないユースホステルは、あいにく予約でいっぱいになっていた。竹芝桟橋から乗ってきた船の2等客室が、島にとどまる間のホテル代わりになるのだ。きちんとベッドもあり、雑魚寝（ざこね）の三等室とは別世界である。

　昼間に口にした島寿司が、また食べたくなった。夜の岸壁から離れて、明かりのともった割烹（かっぽう）に入ることにした。板前の粋なお

兄さんとおしゃべりしていた。真っ黒に日焼けしていて、金色のネックレスをしているが、出（い）で立ちは板前そのものである。仲居のお姉さんもよく日焼けしていてピアスをしており、紫色の和服を着ているのがちょっとアンバランスだった。二人とも水着姿の方が似合うのである。

　板前のお兄さんから、島寿司のネタに使うサワラのほか、特産のパッションフルーツのことなども聞いた。生産の絶対量が少ないので、農協などでも今はないという話だった。

　船に戻り甲板の上に出た。船の明かりで白濁して見える船縁（ふなべり）に、キイロハギが群れていた。ところが、よく目をこらしてみると、小指ほどの小魚が数百匹も、巨大な塊（かたまり）となってうごめいている。明かりがあると魚が寄ってくるのは、逆らいがたい本能だとされ

るが、それが時として命取りになるのである。

シーカヤックに乗る

小笠原で明けた最初の朝、シーカヤックのツアーに参加するため、マイクロバスで二見港の南にある扇浦（おうぎうら）へ向かう。海岸線沿いのカーブとトンネルの多い道を、崖下を見下ろしながら進む。本日のインストラクターは、九年前に小笠原に来てそのまま居着いてしまい、社会復帰できないまま三十歳になった男性だった。それだけこの島の自然に魅せられたというわけだ。

シーカヤックというのは、海の上を進むカヤック、櫂（かい）でこぐ小舟のことである。そのこつは、とにかく前方の水面をこぐようにすること、二人乗りの場合には、同じリズムでこぐということだという。方向転換は後ろの人が、足でかじを調節することになる。



境浦付近の急峻な地形

例えば、左に曲がりたい場合は、前の人は右側だけ前進し、後ろの人は左側だけ後進するようにこげばいい。

僕がシーカヤックの前に、大学生の男性が後ろになったのだが、実は仕切り屋が後ろの方がうまくいくらしい。大学生は要領が悪くて、上手にかじが取れず、あらぬ方に曲がってしまうばかりか、こぐ力も弱いために、僕一人でこいでいるようなものだった。

天狗鼻という岬を越えたところで、いったん浜辺に上陸する。通称メリケンマツという、松に似て否なる大木が生えている。それ以外にも、さまざまな種が落ちている。この類(たぐ)いの植物は、一度海中に落ちた方が発芽率がいいらしい。

境浦に出たところで、戦時中に米軍の空襲で座礁した貨物船、



シーカヤックで座礁船の脇を行く。



休憩のひととき

濱江丸（ひんこうまる）の上をこいでいった。全長百二十メートルもあったとのこと。この船体のおかげで、境浦は防波堤に守られたように、波が穏やかなのだという。

　軽く水遊びしてから昼食の弁当を開く。お湯を沸かしてインスタント味噌汁、ビールにデザートのオレンジまで付いている。それからしばらくは、水中眼鏡（めがね）とフィンを借りて、海中を覗きながら泳いだ。

　ところが、ふだん使っている物と違って、レンズの外に鼻を出すようになっているため、どうしても海水が入ってきてしまう。これは口に手をやって、口から息をするのに慣れてから、水に入ればいいらしい。あとは呼吸のリズムだ。ゆっくり二度、そろそろと吸い、一度に強く吐き出すこと。

ふたたび、シーカヤックに乗り込んだ。境浦の先にはやっと通れるほどの水路があり、正面からすうっと入っていくしかない。かじがうまく取れない僕らは、カヤックが磯にぶち当たるばかりで、なかなか通過できなかった。バックして方向転換して、ようやく抜けたところ、断崖の上に野生化したヤギの群れが見えた。白と黒のまだらのヤギで、野生でも鳴く声はメーメーだ。

　海洋センターにたどり着いた。そこではウミガメの人工繁殖が行われており、生け簀（す）の中には巨大なメスが飼われていた。その子供たちが今、小笠原の海を泳ぎ回っているわけか。また、ザトウクジラの調査などもされているらしい。

　僕らはまた、海上に出ていた。母島丸の見える辺（あた）りは、枝状の

サンゴがびっしり生息している。ただし、多くは茶色がかった灰色で、一部が青みがかっているだけ。沖縄の石垣島で目にしたお花畑とは、ほど遠い感じである。今回の旅では、母島に渡る時間的な余裕はない。

　オールとオールを重ね合わせて、ちょっぴり休憩した後、一気に扇浦までこいでいく。断崖の上に掘られた四角い穴は、すべて戦時中に掘られた壕なのだそうだ。コンクリートを使わないトーチカで、そこから銃撃戦が想定されたわけだ。実際に米軍の艦隊は小笠原沖に集結し、戦闘機による爆撃も行われたが、住民は強制疎開させられており、米軍が父島に上陸したのは、終戦後の九月になってからだったという。

　ついに、シーカヤックのツアーは終わった。浜の上に引き上げ、

救命胴着を外した。僕の気持ちは早くも、明日の冒険に向かっていた。弁当を作ってくれる店を探したら、パッションフルーツを二個二百円で食べさせてくれた。蜜柑(みかん)に似た味で甘酸っぱく風味がある。種ごとばりばり食べた。

ドルフィン・スィムに挑戦

ここで語ろうとしているのは、実は父島での体験ではない。僕の人生観を変えかねないような世界を、垣間見せてくれたのは海そのものである。行きの航海で目にした聟島の周辺で、ドルフィン・スィムを中心としたツアーが開かれる、ということを船内で知った僕は、多少の不安を抱きながらも無線の電話で予約をしていたのだ。ドルフィン・スィムというと、ちょっと聞き慣れないかもしれないが、要するに、シュノーケルを使ってイルカと泳ぐのである。

その日は素晴らしい天候だった。朝食を急いで済ませると、ジュースとビールを買い、昨夜頼んでおいた弁当を受け取った。シ

ユノーケルと水中眼鏡は自分で用意し、フィンだけは借りることにした。参加するのは三十名弱というところか。学生風の若い男女が大半で、波も穏やかでこれほど天候に恵まれるのは、久しぶりだということだった。

聟島ツアーに行く純白の高速船、ミスパパヤ号に乗り組んだ僕らは、簡単な説明を受けると、二見港内のとびうお桟橋を出港した。自然が相手なので、イルカに出会えるかどうかは、保証の限りではなかったけれど。

小笠原の海を見るまでは、沖縄の海と似たようなものか、と思っていたが、実際はかなり異なっていた。中国大陸から突き出た陸橋が、地殻の変動によって水没して生まれた沖縄では、周囲の海は遠浅で沖にはサンゴのリーフが発達している。浅い海は灼熱（しゃくねつ）

の光に温められ、いわゆるエメラルド・グリーンに輝いている。それに対して、海底火山の隆起によって出来た小笠原では、浜から数メートルも行けば、たちまち海は崖のように落ち込んでしまう。

小笠原の海の美しさといったら、とにかく海が青いことだ。光の具合では黒くさえ見える。言わば「黒潮」の直中(ただなか)にある、といった印象なのである。

兄島瀬戸を抜けたところで、さっそくイルカの群れと出くわした。女の子たちが「ああ、かわいい」と叫び声を上げている。これほど多くのイルカが海にいて、人懐っこく船の左右や前方を泳ぎ回るのには驚いた。まるで船を先導しようとしているように、



イルカは船縁に寄ってくる。

舳先（へさき）でしばらく泳ぎ続ける者もいるのだ。「すごい、すごい」という声に応えてか、しきりにジャンプを見せてくれたりもする。言葉が通じなくても、こちらの気持ちを察してくれているのだろうか。

　さて、少し行った辺りで船はエンジンを止めた。いよいよドルフィン・スィムの開始である。ところが、僕はまだこのスポーツのことを熟知してはいなかった。浅瀬でシュノーケルをするのとは大違いなのである。まず外海には波がある。その日は凪いでいたものの、五十センチぐらいのうねりがあった。救命胴着を身に着けていても、五秒に一回ほどは鼻の上まで海水が来る。その上、シュノーケルは多少の水が入り込むのが常だから、陸上のように息をしようと考える方が、そもそも間違っているのである。それ

を忘れていた僕は、溺れそうになったというのは大袈裟（おおげさ）だが、船が難破して荒海に投げ出された人間の恐怖を、多少なりとも味合わされたのだった。

　それにはこつがある。何度か繰り返すうちに、ようやく要領がつかめてきた。まず恐れや不安は捨て去ること。シュノーケルを着けたら、リラックスをして水中をイメージしてみよう。そして船縁から静かに海中へ。頭を上に出しているより、とにかく、水中眼鏡で下を見るようにすること。ゆっくりと二度息を吸い、長く深く吐いていく。少し疲れたら手足の動きを止め、しばらく海面を漂っていればいい。リラックスしながら緊張する、と言ったら矛盾するかもしれないが、緊張を解きながらも油断を怠（おこた）らないことだ。その時から人間であることをやめ、別の生物に生まれ変

わる気持ちになって。

ようやく僕はイルカの写真を撮ることができた。ドルフィン・スィムではイルカに恐怖心を与えないように、基本的に手の使用は禁じられている。足のフィンだけを使って泳ぎ、手を差し出さないようにして、カメラも顎（あご）の下に引きつけたままで。数頭で群れを作る彼らは、水面に顔を見せた時の愛らしさとは、全くの別面を水中では見せる。筋肉の塊として流線型の魚雷のごとく、恐ろしいスピードで人間の追跡を軽く振り切ってしまう。

けれども、イルカが見えるうちはまだ幸せだ。何も見えない海は寂しい。僕はエイズが発症して死んだデレク・ジャーマンが、晩年に製作した『ブルー』という映画を思い出していた。スクリ



海中のイルカは魚雷のようだ。

ーンには青い色しか映し出されず、ジャーマンのモノローグが延々と続く。そこで彼はエイズと共存していこう、という世間の運動を糾弾する。そんな生易しいものではないのだと。孤独があるのだ、その深い青には。それが象徴するのは大空の虚無か、はたまた母なるものとして、そして難破した者を飲み込む深淵としての海か。

とにかく僕が目にしたのは青だった。他に何も見えない静寂。時折どこから湧いてくるのか、ぷくぷくと泡が昇ってきた。どこまでも深く、そして底無しの世界。

お昼の時間になった。ミスパパヤ号からモーターボートに乗り移り、膝まで海水に浸かりながら、智島の海岸に上陸した。ここ



聟島の沖までやって来た。



聟島にもかつて人が暮らしていた。

は戦前には入植者がいたが、戦争末期に強制疎開させられてから、アメリカによる統治時代を経て日本に返還されても、無人島のままになっている。

　草むらの中にはただ一つ、開拓者の墓が残されていた。もはや親族が詣でることもまれなのだろう。この島を観光で訪れる若者が、ジュースの缶をいくつもお供(そな)えしていた。

　戦前に牧場があったとはいえ、この島には実に高木が少ない。というのも、人間に置き去りにされたヤギが野生化し、島の草木を食い尽くしてしまったからだ。海岸近くに蜘蛛(くも)の糸のような花を咲かせるスパイダーリリーと、枝に毒を持つという夾竹桃(きょうちくとう)が、かろうじてヤギの貪欲な胃袋の犠牲にならずにいた。

　海岸から頂上の大山までは三十分足らず。そこには戦時中の日

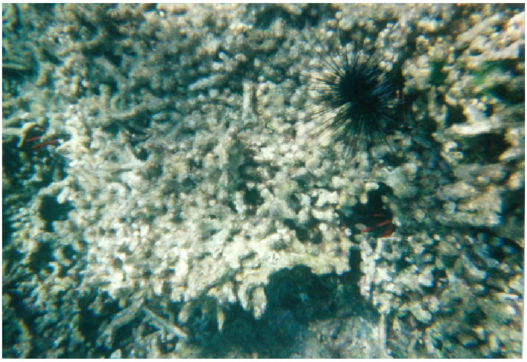


野生化したヤギが草を食い荒らす。

本軍の施設が、礎石のみを亜熱帯のまばゆい光にさらしていた。小笠原諸島の最北端、北ノ島から針ノ岩までがすっぽり、この地点を中心とした巨大な水盤の中に収まってしまう。十頭近くのヤギたちがメーメー鳴きながら、しばらく遠目でこちらの様子をうかがっていた。その他には島にはただ潮騒と風の音しかない。

ミスパパヤ号に乗って、媒島の周辺でも、またシュノーケリングをした。これからサンゴを見るという説明を受けた。正面の岩場の海中まで行き、それから左方にいる船まで戻るとなると、十五分近く泳がなければならない。気が遠くなりそうになった。

覚悟を決めて水中に身を投じた。とにかくリラックスして、呼吸をゆっくりして。小笠原のサンゴは、ほとんどが灰色がかった



小笠原にもウニがいた。

板状のサンゴだ。その間には小魚に交じって、よく見かける黒いウニのほか、毒々しい真っ赤な針を立てているウニもいる。体長二十センチぐらいのずんぐりしたナマコも。

最後に泳いだのは嫁島のマグロ穴だった。船縁から海に次々と下りた僕らは、五十メートル先の切り立った崖がくぼんだ辺りまで泳いでいった。そこには素晴らしい世界が広がっていた。

水深は十メートル以上あったと思う。海底のすり鉢状の岩がえぐられたみたいに同心円を描いていた。沖縄の座間味(ざまみ)の海で発見された物に似ている。ちなみにそちらは海底遺跡ではないか、と騒がれているのだが。

ここには確かにマグロがいた。小振りで体長数十センチのイソ



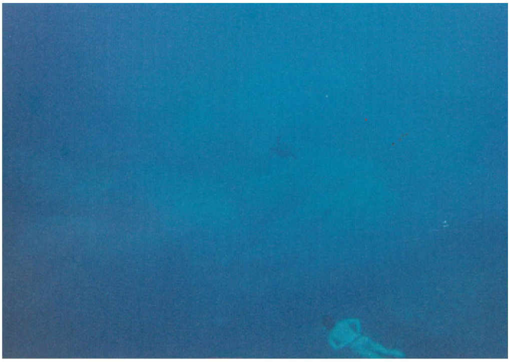
底なしの海の魚たち



海中に光が差している！

マグロである。それから立派な尾頭付きになりそうな鯛も数匹いた。僕が最も感動したのは、緑色の巨大な海亀の出現だった。そこに向かって泳ぎの巧みな青年が、人間とは思えぬしなやかさで潜っていき、そっと海亀に手を差し延べたのである。そのしぐさには深い愛が込められていた。

　リュック・ベッソンの映画『グラン・ブルー』のラストシーンを、覚えておいでの方はいらっしゃるだろうか。深海への素潜りに挑戦して命を落とした友が、死に際（ぎわ）に洩（も）らした言葉を確かめるために、主人公は同じ潜水病に冒された身でありながら、真夜中の海の底へと潜っていく。深い海の世界には愛があるという確信に応えるように、死を迎えつつある主人公の前にイルカが姿を見せる。それは幻に過ぎないのかもしれないが……。その感動のシ



あそこに海亀がいるぞ！

ーンと現実に目にした光景がオーバーラップしてしまったのである。気が付くと青年と海亀の姿は失せていた。

次の瞬間、目の前は銀色の躍るうろこでいっぱいになっていた。数百数千のイワシの群れに取り囲まれた僕は、どこを見回してもうろこが放つ銀色の光に目がくらんでしまった。魚たちはまるで僕なんか存在しないかのように、勝手にそして自由気ままに泳ぎ回っている。そこには瞑想の世界が広がっていた。この体験は僕の生の中では一瞬に過ぎないかもしれないが、魂の中に深く刻み込まれるだろう。

嫁島の海で貴重な体験をした後、帰路でも多くのイルカと出会えた。あとはひたすら猛スピードで、波を切って父島を目指した。



猛スピードで父島に戻る。

泡立つしぶきを眺めながら、今日の出会いの数々を反芻（はんすう）していた。夕日が水平線を照らしている。一日の終わりが近づいてきた。
二見港に接岸すると、あっけなく解散となった。ミスパパヤ号に別れを告げ、港の周辺を歩いていると、辛子の効いた寿司が食べたくなった。今晩も泊まる船室には、大学一年生がいるのを思い出した。島寿司とビールをごちそうしよう。現在とは違って、高校を卒業すれば、酒も煙草も普通にやっていた。それだけおおらかな時代だった。
ビールを飲みながら、今日の出来事などを語った。彼は広島に実家があり、川崎市内の大学に通っているとのこと。境浦の濱江丸の周りで潜ってみたそうだ。僕は前日のシーカヤックでの体験を思い出した。彼は疲れていたらしく、ほどなく眠ってしまった。

目にした光景を記憶にとどめようと、日記をつけ続けていた。消灯は午後十一時だった。ベッドに横になる。この船室とも明日の朝にはバイバイだ。またあの三等船室でごろ寝と思うとぞっとした。

マイクロバスで島内巡り

朝になった。昨日と比べれば雲が多い。食事を終えると、マイクロバスで島内巡りをすることにした。運転はおじいさんで、乗客は十名足らずである。乗り込んで最初に訪れたのは、父島の北西部、三日月山の手前にある展望台、ウェザーステーションだった。

ここからは右に兄島、それと重なるように弟島が見える。目を南方に転じれば、彼方に母島もかすんでいる。ホエール・ウォッチングが行われる海域である。兄島にも戦前は人が住んでいたが、現在一般人が住むのは父島と母島だけである。

兄島瀬戸が眺められる長崎展望台に移動した。この海峡はとり



東京は1000キロ先か。

わけ大潮のときに、川のように流れて渦が逆巻く。対岸の兄島では、野生化したヤギが群れていた。父島では農作物を荒らす害獣として、ほとんど駆除されてしまったというが。若き日のブッシュ元大統領、もちろん、親父の方であるが、兄島瀬戸の東端で、乗っていた戦闘機を日本軍に撃墜され、からくも生還することができたと言われている。

父島の中ほど、東海岸の初寝浦は、初日の出を拝む名所として知られている。根室（ねむろ）ほど東ではないが、一般人が渡れる所としては、日本で最も早く夜が明ける。実際にはレアアースで注目される、絶海の孤島南鳥島があるが、自衛隊員や気象庁の職員を除く渡航は制限されている。

初寝浦はまた、戦時中に海軍の施設があった所である。米軍は一時、小笠原上陸を計画していたそうで、父島の沖にも軍艦が列をなしていたという。ところが、父島には大きな飛行場もないし、戦車で上陸することもできない。そこで海軍の飛行場が三つもあった硫黄島が攻撃された。硫黄島の日本軍が玉砕した後、日本側の余りの抵抗の強さに、父島への上陸は見合わされた。

　日本軍は当初、初寝浦から大砲を撃っていたが、米軍機には届かない。というのも、明治時代の物を使っていたからである。日本軍が一発撃つと、百発撃ち返してくる。機銃掃射の痕（あと）がコンクリートの施設に残っていた。これではいけないということで、日本軍は米軍上陸に備えることになった。父島の道路も崖上の壕も、日本軍が整備したものである。

最後に寄ったのは、初寝浦から島を横断した、東海岸を見下ろす亜熱帯農業センターである。ここには、小笠原のほか、南米やオーストラリアなどの植物が集められている。タコノキは堅い実を鉈で割らなければならない。その際に、指も一緒に切断してしまった人がいる。中には落花生（らっかせい）に似た実が入っている。なかなかおいしい物で、お酒に漬けたりもする。

タコノキの実を目当てに、オカヤドカリが標高二百メートルの辺りまで登ってくる。また、この亜熱帯農業センターの周りには、オガサワラオオコウモリが住み着いている。本土などの洞窟で生息するものとは異なり、昼間は枝からぶら下がって、日向ぼっこしている。マンゴーやバナナが大好物だということ。寒い日など



パイナップルに似たタコノキ

は、数匹が塊となってぶら下がる。仕草は子猿のようで、意外とかわいいものであるが、果実の汁を吸うために、売り物を台無しにしてしまう。天然記念物であるので、このコウモリを捕って食べることはできないが、マリアナ諸島などでは、高価な珍味として扱われているらしい。

帰路は扇浦や境浦の海岸沿いを走って、二見港に戻ると、もう午前十一時半を回っていた。欧米系日本人の祈りの場所、聖ジョージ教会の前に来た。小柄で簡素だが美しい。昼食は島寿司に、パッションフルーツのジュース。

おみやげに写真集などを買って、今朝(けさ)まではホテル代わりだった船に乗り込んだ。あてがわれたのは、行きと同じ三等船室。足を伸ばして横になるだけで、隣の人の頭を蹴っ飛ばしてしまう。



欧米系日本人が祈る聖ジョージ教会

同室だった大学生の姿を認めた。軽く挨拶(あいさつ)したが、会話はもはやはずまなかった。

楽園との別れ

桟橋は見送りに来た人たちでいっぱいだった。甲板にはハイビスカスの花輪を首にかけた人々がいる。銅鑼（どら）が鳴る。午後二時、二見港を出港。花輪が桟橋に向かって投げられたが、むなしく海上に落ちてしまう。それと同時に、港に停泊していた五隻余りの船が、別れを惜しむように一斉に走りだした。

マリンスポーツを主催している団体の船だった。ともに遊んだ束（つか）の間（ま）の友人と、別れを惜しんでいるのだろう。聟島ツアーに連れて行ってくれたミスパパヤ号も、二見港の出口まで送ってくれた。船上には十名以上の人が、手を振っているのが見えた。

船室に入ると、昨日一緒にドルフィン・スィムに参加した女の

子たちと出会った。
「今日も半日だけ参加したけど、イルカには会えなかったわ。風が強かったからかしら」
昨日の僕らは幸運だったのだ。あれほどのイルカと出会えて、青年と海亀の交感まで見られたのだから。リュック・ベッソンの映画の一コマみたいな世界が、目の前で展開していたのだから。

しばらく僕は放心したように、何もない太平洋の、真夏の潮と光の戯れを眺めていた。昨日、聟島からの帰途に、インストラクターが話してくれた言葉がよみがえった。
「明日の二時の船で帰る人は、三時半頃に船の右側に聟島が見えますから、懐かしんでください……」

父島を過ぎてまず見えたのは嫁島だった。やがて、媒島、聟島とすべてが視界に入ってきた。双眼鏡で覗くと、岩肌のきめまでがくっきり見えた。嫁島の洞門も目の前にあるみたいに。マグロ穴での神秘的な光景、どこを見回してもうろこが放つ銀色の光に目がくらんだ瞬間が、幻のように頭をよぎっていく。

なだらかな島影がすっかり消え去るまで、僕は甲板に立ち尽くしていた。小笠原との別れ、もしかすると、二度と訪れることのない別れなのだから。これから数百キロ、島らしきものはない。

船の中ほどに立っていた僕は、丸い水盤の中央に位置している。黒潮と言われる濃い藍色が、うねりながらどこまでも続いている。真夏の光に堪えて、空を見回していくと、水平線との接点も円をなしている。キリストは何もない砂漠で神の声を聞いたという。

僕の耳にはポセイドンの歌が伝わってくる……。

朝の海。黒潮は悠々(ゆうゆう)と流れる大河のようだ。ゆるやかに見えても、流れる量は膨大で力強い。背後から夏の太陽を浴びて、甲板に立つ僕の影は泡立つ潮の上に映っている。僕自身は船と同じスピードで動いているのに、海上のドッペルゲンガーは、じっと海上の一点にとどまっているように見える。

やがて遠方に潮目が現れた。それを境にして、黒潮の動きはほとんど止まってしまう。そして再び、潮目。海が息をしているのだろう。海の中には僕らの知らない地図があって、そこを濃い藍色の大河が流れているのだ。海面にカモメが弧を描いて舞っている。魚が集まっているんだろう。

小笠原での体験を胸に抱きながら、まだ若かった自分は、甲板でノートに青くさい言葉を書き連ねていた。
「これからの僕は、世界という書物を読んでいくんだ。無限に見えるページの中から、読むべき文を見出していくのは自分自身だ」と。

リュック・ベッソン の『グラン・ブルー』("Le Grand Bleu" de Luc Besson)

海の自然を描いた映像詩『アトランティス』"Atlantis"で知られるフランスの映画監督、リュック・ベッソンが、素潜りする青年の夢と死を描いた作品である。いずれも音楽を担当しているのは、フランスの作曲家エリック・セラ Eric Serraである。ベッソンの映像美は、セラの音楽と一体となって生命を得た。

ベッソンの『グラン・ブルー』は、ダイバーのジャック・マイヨール Jacques Mayolがモデルになったとされる。親日家で日本に別荘もあり、イルカの集まる御蔵島の海に潜っていた。生前の充実した素顔は、日本のテレビでも放映されたが、晩年は鬱病

に悩み、イタリア・エルバ島の自宅で自殺した。テーブルの上には『グラン・ブルー』のビデオが置かれていたという。マイヨールは映画の神話的なイメージを思い描きつつ、作品の主人公のように死を選んだのだろうか。体験を脚色した映像詩が、モデルとなった本人の最期をも決定づけたわけで、フィクションと現実の深いつながりに、呆然としたのを覚えている。

マイヨールが自殺したのは、二〇〇一年の十二月だった。僕がベッソンの『グラン・ブルー』や『アトランティス』に憧れて小笠原を旅したのは、一九九八年八月のことである。詩を書き続けた父が闘病の末に死んだ翌年だった。ベッソンの映像美に近い光景を目にした体験は、後に『君のまだ見ぬOGASAWARA』と題したエッセイにまとめた。それはともかくとして、ベッソンの『グ

ラン・ブルー』の世界を見ていこう。

主人公はモデルのマイヨールと同じく、ジャックという名の青年である。ライバルのエンゾと素潜りの競争をしている。エンゾは無謀な挑戦をして命を落とす。息を引き取る前に、エンゾは自分の体を海に沈めてくれと頼む。そこはダイバーにとっての楽園であり、人魚が愛を確かめに来るとされる場所だからだ。愛が認められたとき、人間は地上に戻る理由がなくなる。遺言通り、ジャックは泣きながら、エンゾの体を深海へ運んでいく。

危うくジャックまでが死にかける。一命は取り留めたものの、海からの呼び声には逆らえず、恋人のジョアンナが止めるのも聞かず、夜の海にボートを走らせる。ジョアンナが妊娠していること

とを告げても、ジャックの決意は揺るがない。

体の不調を押して潜水しようとするジャックに、ジョアンナは「行って、私の愛を確かめて」と告げる。ジョアンナは楽園にいるという人魚を、自分自身と重ね合わせているのである。

ジャックは潜っていく。海底には一頭のイルカがいる。機器から離れて手を差し伸べ、イルカを抱きに行く。それこそダイバーにとっての人魚であり、もはや地上に戻る理由はなくなる……。

ラストシーンの美しさには息を呑んだ。この映画は音楽と一体になった映像詩であり、魂の深層に潜む、太古以前の水中生活へのノスタルジーを呼び覚ます。深海に住むイルカへ愛を捧げるために、ジャックは事故死した父や親友エンゾと同様に、海中での

愛と眠りの方を選ぶのである。

こうして見てくると、死を美化した世界であり、モデルとなったマイヨールが、自身で命を絶つことを選んだのも、必然であったような気がする。それなら、どうしてマイヨールは、もう少し美しい死に方を選ばなかったのだろう。

あとがき

僕が小笠原に向かって旅立ったのは、一九九八年（平成一〇）八月一日のことである。

八月一日　竹芝桟橋出港
八月二日　父島二見港入港　ジャングル体験
八月三日　シーカヤックに乗る
八月四日　聟島列島で、ドルフィン・スィムを体験
八月五日　マイクロバスで父島島内を巡る　父島二見港出港
八月六日　竹芝桟橋入港

それから早くも十五年の月日が経ってしまった。若かった頃の体験だが、当時の日記をもとにしてまとめ直した。書き進めながら、懐かしい記憶がよみがえってきた。

二〇一三年六月十九日

今回、リュック・ベッソンの『グラン・ブルー』と題したエッセイを、巻末に加えることにした。

二〇一四年八月九日

部屋の中を片づけていたら、行方不明になっていた小笠原の写真が出てきた。高性能ではないアナログカメラと、水中撮影用の使い捨てカメラで撮影した写真だから、現在のデジタルカメラのようには写らない。海中は何もかもブルーだから、輪郭をはっきりとらえるのが難しい。デジタル化したときに多少修正を加えたが、電子書籍に収録するためにサイズを小さくしたので、魚や海亀の形は余計とらえにくくなってしまった。

ただ、文章で読むだけよりも、当時撮影した写真があった方が、まだ小笠原を訪れたことのない方には、イメージしやすいと思い、比較的よく撮れている写真を中心に収録することにした。

二〇二二年七月五日

高野敦志